

レッジョ・エミリア教育の美的活動における学びの「可視化」

三 梶 正 典*

(2013年11月13日 受理)

“Visualization” of Learning in Esthetic Activity of the Reggio Emilia Education

Masanori MIMASU*

This research considers analysis and the effect of “visualization” of learning in various artwork of the childhood-education system of the Reggio Emilia city in Italy by childhood education. and, this research aims at pulling out the “creativity” which every person has based on discovery and the way of thinking of a kindergartner.

Keywords: the childhood-education system of the Reggio Emilia レッジョ・エミリア幼児教育, artwork 美的活動, visualization 可視化

1. はじめに

レッジョ・エミリア市の幼児教育システムの特徴は、美的活動を中心にその創造的体験によって子どもの個性や可能性を最大限に引き出しているところにある。日本でも2001年に佐藤学・秋田喜代美が初めて「レッジョ・エミリア市の挑戦」のビデオを通して紹介してから後、石垣恵美子、池内慈朗など多くの研究者によってその教育システムの概要が明らかにされてきた。そのレッジョ・エミリア教育の基本的な原理は、40年間に渡り教育者が保護者と市民、及び公的機関などと協議を重ねながら公的な教育システムとして作られてきたものである。その教育システムは、常に実験的な教育方法を試み、教師たちが幼児と同じ視線に立ちながら、コミュニケーションをとることによって今なお新しい題材や素材を発見し続けている。その中核となるのがアートをベースとし、その美的活動によって子どもの学びを「可視化」させていく教育実践である。本研究は、レッジョ・エミリア教育の学びを「可視化」させる美的活動を学習過程のモデルとし、その実践の効果を考察したものである。

(1) 美的活動

レッジョ・エミリア教育の最も代表的な教育方法が自然物と人工物の豊富な素材を活用した美的活動である。美的活動は、幼児期のための空間がどのような特徴をも

つべきかを探求する試みの表現活動で、その表現活動の中で基準となるキーワードやメタファーが様々な視点から捉え、設定されている。そして、その美的活動を記録し、共有することによって学びが「可視化」され、世界の教育者たちに驚異的なインスピレーションを今なお与え続けている。レッジョエミリア教育では美的活動の具体的な視点をキーワードやメタファーとして以下の9項目を示している。

- ①複雑な柔軟性 ②関係性 ③浸透性 ④多感覚性
- ⑤後成説 ⑥コミュニティ ⑦構築性 ⑧物語性
- ⑨豊かな日常性

それぞれのキーワードやメタファーの中で美的活動が行われている。美的活動のベースになるのが、「場所」であり「空間」である。その場所と美的活動の関係と具体的な視点の設定について、レッジョ・チルドレン・ドムス・アカデミー・リサーチセンターのジェリー・オ・チェッピ (2008) は以下のように述べている。

場所の機能と形態の関係は、ますます希薄になっています。エレクトロニクスとテレマークの到来、新しい使用法と社会的変革は、空間のアイデンティティーをますます弱め、曖昧にします。オフィスで食べたり、交通機関や家で仕事をしたりできます。私たちの場所のアイデンティティーは、今やしばしばただ習慣的なだけです。例えばオフィスが質感や色彩や個人的な思い出に満ちているというよりは、

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

ほとんど単色で反復的でなければならないという理由にはもはやありません。場所は、ますます多様に自由に使用することができます。その用途をかえる為には、若干の装置を変えるだけで十分です¹⁾。

その装置が、9つの視点であり、それぞれの視点から現代の特徴や行動様式、その必要や要求にこたえる新しい形や色が表現されてくる。その美的活動の過程や作品などを記録することにより、レッジョ・エミリア教育の学びが「可視化」されてくるのである。その「可視化」された学びは、成果だけでなく、認識と形成の過程も記録されることによって、教育の行程と関連性をしっかりと繋げながら、イメージ、素材、事物、色彩によって作られている。

2. 可視化

可視とは、目に見えることであり、可視化とは、見えないもの（事物・現象）を映像や画像・グラフ・表などにして見えるようにすることである。「データの可視化」「可視化システム」「可視化プログラミング」「可視化経営」と多様な情報化社会の中で1990年代から多く目にするようになった言葉であるが、教育の中でもその成果や評価として「可視化」という言葉が近年登場し始めている。「分かりやすく」というのが、原点にある言葉ではあるが、美的活動や創造的活動の中では、作品そのものが、可視化された物や画像であるために「可視化」という表現はされてなく、不自然な感じさえする。しかしながら、「分かりやすく」という視点から見ると、作品そのものから見える物は、決して「分かりやすい」ものではなく、むしろ見る人にとって様々な価値観を与えてしまう、いわば「分かりにくい」象徴的なものにさえなってしまう感がある。レッジョ・エミリア教育では、美的活動を記録することや共有するという過程を完成作品と共に提示することで、学びの「可視化」を行なっている。その実践の中で最も重要なのが活動を組み立てていく指標である。指標は、関係の形態、光、色彩、素材、におい、音、微気候の7つに分類され、それぞれが癒合的に機能しながら驚くべき学びの世界が「可視化」されているのである。

レッジョ・エミリア教育の美的活動における学びの「可視化」で、最も注目するものは、ローリス・マラグッツィ国際センターの場所・空間との対話による美的活動である。佐藤（2011）はこの美的活動の意義について以下のように述べている。

場所を観察すること、場所のアイデンティティとその記憶とその変化と変容の理由を理解すること

は、文化的で社会的で感情的な場所との旅を行う方法であり、共感と参加と注意と好奇心の態度を展開し形成する旅のプロセスに近づく道を得る方法でもあります²⁾。

その方法が、前述したレッジョ・エミリア教育の基準であり、学びの「可視化」へと繋がる指標でもある。特にローリス・マラグッツィ国際センターの場所・空間との対話による美的活動においては、関係の形態、光、色彩の指標による「可視化」が子どもたちの持つ知性と創造力の可能性を見事に引き出している。関係の形態では、コミュニケーションを中心に、地域との関係性と透明性。光では光の景観の特徴を中心に質感や影、可塑性。色彩では、色彩の調和を中心に配置や景観など、それぞれが美的活動のアクセントの役割をもちながら、「可視化」を形成している。



図1 ローリス・マラグッツィ国際センターの「円柱ホール」

レッジョ・エミリア教育の美的活動をスタートさせる時、先ず大切にするのは、子どもたちの興味・関心である。図1は、ローリス・マラグッツィ国際センターの「円柱ホール」と呼ばれる場所で、美的活動を展開していく上で最も重要になった場所で、子どもたちがローリス・マラグッツィ国際センターに訪れ、場所を探検したときに最も興味を示した場所でもある。教師たちは、子どもたちの動きを「見つめ」、言葉に「耳を傾け」て美的活動による「可視化」の方法を見つけていくのである。その過程は「子どもたちが視覚的に空間を探検するときを使う視点や、どこで注視する視点を止めるのか、子どもたちの意見でどのようなものが場所を表象しているのかを見るのはおもしろいものです³⁾」というように、楽しさが溢れている。以下は場所を探検したときの子どもの声である。

子どもたちの声（円柱ホール）：

場所っていうのは「世界すべての場所」のこと。場所の音を聴けるよ。たとえば木は風のことを教えてくれる。空気で場所がわかる。場所はここ。どんなかんじか調べるためにちょっと歩きまわるんだ。それから目と耳でも鼻でも、場所の香りも聴けるよ。手で聴けるよ⁴⁾。

3. 可視化の方法

子どもたちが場所や空間から好奇心を感じたとき、自然と子どもたちの動きに形とエネルギーとリズムが生まれてくる。レッジョ・エミリア教育の美的活動においては、子どもたちから生じた動きや形やリズムをキャッチし、子どもたちとの会話を通してより深い思考をつくり、様々な視点によって豊かになった学びから美的活動を「可視化」へと進めていっている。その方法を顕著に示している一つが、場所や空間における動きを見つめ、その中から出てくる言葉に耳を傾けることによって活動を「可視化」させるコレオグラフィー（図2）。もう一つが共通の形の円柱をベースにその円柱に美的活動を展開させることによって「可視化」させる円柱の服装デザイン（図3）である。

（1）コレオグラフィー

コレオグラフィーは、Choreo（ダンス）と graphy（書く・構成する）の合成で、ダンスのステップの記録を意味する言葉である。子どもたちが体感した動きや歩き、走りやその軌跡を色や線・形による美的活動によって学びは「可視化」されることにより記憶や反復、即興などの表現力が生まれ、展開して行っている。

コレオグラフィーの美的活動について、佐藤（2011）は以下のように述べている。

子どもはいろいろな動きをしますが、この空間を探検するときが一番使われるのは、走ることです。子どもたちの言葉はすべての力強さを、自由の感覚を、走るときの興奮を伝えます。そういうものから引き起こされる知覚や想像を解釈する子どもたちの能力や可能性も伝えます。（中略）この形と動きの連続は、調整されて、コレオグラフィーの構成要素に組み込まれます⁵⁾。

（2）円柱の服装デザイン

「白い円柱たちは素敵なんだけど、似すぎている。どの一つだって、ある一つの円柱なんだって、わかるようにしなきゃ」の子どもの言葉などから、円柱に服を着させて、円柱の個性や違いを出そうとするアイデアから円柱の服装デザインという美的活動が行われた。この服装デ



図2 コレオグラフィーとそのデッサン



図3 円柱の服装デザイン



ザインの美的活動について佐藤（2011）は以下のように述べている。

空間を探検するために、子どもたちは身体が感受する現実と想像とを同じくらいよく使います。ローリス・マラグッツィ国際センターにいる間、子どもたちは、空間と建築についてのコメントとそれらが示すイメージを組み合わせせていました。この融合からわき出るアイデアは、想像と可能性を創造的に組み合わせる、勇敢でユーモラスなものに見えます⁶⁾。

本研究では、レッジョ・エミリア教育の学びを「可視化」させる美的活動の具体的な方法として、場所や空間における動きを見つめ、その中から出てくる言葉に耳を傾けることと、共通の形をベースに美的活動を展開させる2点に着目した学習モデルを作成し、実践した。

4. 美的活動の学びの「可視化」を学習過程モデルとした実践

これまで色々な教育概念や教育方法などをもとに、ひろしま美術館で実物の絵や彫刻を鑑賞し、その後表現活動を行う創造的体験を通して、子どもたちの「創造性」を引き出す試みを行ってきた。今回は、レッジョ・エミリア教育の美的活動の「可視化」を学習過程モデル（図4）とし、子どもたちの作品鑑賞から表現活動へと向かう実践を行った。その方法は、美術館での子どもたちの動きを見つめ、言葉に耳を傾けることと、共通の形から発想を展開させていく方法である。基本的な学習過程は、前回の裸婦像を描く実践の流れを基にしているが、それぞれの過程の中で「可視化」の方法を取り入れて以下のように設定し実践した。

（1）学習過程モデル

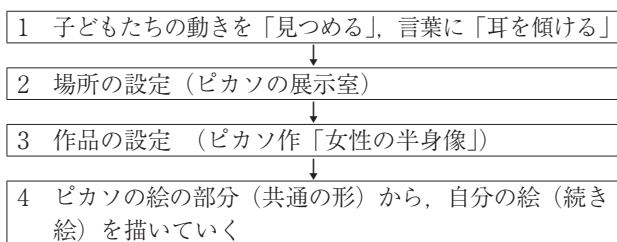


図4 美的活動の学びの「可視化」を基にした学習過程モデル

（2）授業実施場所・日時・対象園及び学年の園児

実施場所 ひろしま美術館 常設展示室及び中央ホール
 日時 2013年6月3日（月）11:00～11:30
 対象園 聖モニカ幼稚園 年長園児 51名

（3）学習のねらい

本学習では、以下のようなねらいを設定し、実践した。

- ①実物の作品を「みる」「語る」鑑賞活動を通して空間や作品との対話を楽しむことができるようにする。
- ②ピカソ作「女性の半身像」（図5）を見て気づいたことを「女性の半身像」の部分（共通の形）（図6）から一人ひとりが発想を広げて描くことができるようにする。
- ③美的活動から創り出される様々な発見や発想をもとに一人ひとりがもっている「創造性」を引き出すことができるようにする。

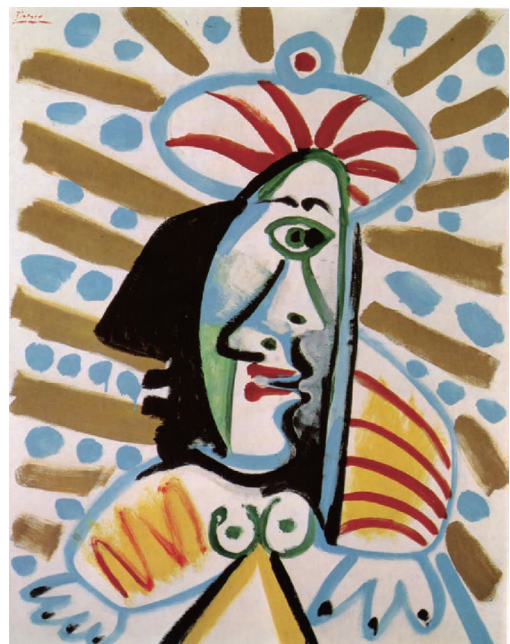


図5 ピカソ作「女性の半身像」



図6 「女性の半身像」の部分

5. 事例の考察

(1) 子どもたちの動きを「見つめる」、言葉に「耳を傾ける」

「どの場所も魂（アニマ）とう存在の証を持っています。その魂を発見しかかわろうとすることは、私たち自身の魂を知るために学ぶことでもあります。」

このジャイムス・ヒルマン（2004）の言葉は、その場所と美的活動の関係と具体的な視点の設定を最も大切な一つとして位置づけているレッジョ・エミリア教育の声明とも言って良い重要な言葉である。場所に触れ、場所を知ろうとすることは、子どもの美的活動を活性化させ「創造性」を引き出す大きな窓口となるのである。今回の実践では、美術館に入ってから園児たちの動きや言葉を「見つめ」「耳を傾ける」ことからスタートした。まずは日常と違う場所に「へえ～！」「なんかすごい！」など全体で空間を体感していた。中でもピカソの作品が多く展示してある空間では、「わーピカソだ！」「へんなかお！」「おもしろいかお！」など自分たちの一倍近い表現を感じるのであろうか、作品に対する反応の度合いや言葉の多さが変わっていた。

(2) 共通の形（ピカソの女性の半身像）から発想を展開させていく

前回の実践の時、多くの園児がピカソの絵にとっても興

味を受け、多くの言葉を発していたことを受け、その後、幼稚園の先生方と協議し、今回は、ピカソの作品「女性の半身像」を美的活動の題材に選んだ。見て気づいたことをお互いに出し合った後、それぞれ感じた顔のイメージを「女性の半身像の絵の部分（図6）に各自の気づきや発想をもとに、その続きを描いていく」という方法で行った。白い画用紙にあらかじめ絵の部分印刷し、黒鉛筆（ダーマトグラフ）一色で部分の絵から一人ひとりが感じる形を描かせた。共通の形は、子どもたちが最も注目した「目が一つ」の場所を選んだ。

(3) 園児の様子（美術館での鑑賞活動～美的活動～その後の園に帰って）

今回のひろしま美術館での美的活動中や、その後園へ家に帰っての様子などを各担任の先生に書いていただいた。以下はその後の園児の様子である。

- ・「何かめっちゃくちゃに描いたみたい！」「何か変な顔！」と疑問に思った子どももいたようです。頭の部分を見て「何かタケコプターみたい！」「目が一つしかないよ～！」「あれ？手の指が3本と4本じゃ～！」「華がへん！」といろんな発見をしていました。中でも女性の棟の部分については、「ボタン？」「眼鏡かもしれない？」などと話していた。
- ・思いのままどんどん描いていく子ども、クスクス笑い



図7 ひろしま美術館常設展示室 中央ホールと第4展示室



図8 絵との対話の場面 ひろしま美術館常設展示室

ながら楽しそうに描く子ども、画板を膝の上ではなく地面に置いてかがみ込み、抱え込むように夢中になって描く姿などがありました。

- ・紙に顔を近づけて、夢中になって描いている子どもたちの中には、時間がきても「まだ描きたい！」といった様子もありもっと時間があれば延々と描き続けるのではないと思うほどでした。
- ・描くときには、ピカソの「女性の半身像」の絵を思い出して描こうとする子どもや、自分で想像したものを描きたすこどもなど様々でした。描き始めるタイミングもすぐに描きはじめる子どももいれば、じっくり考えてから描き始める子どももいて、それぞれ違っていました。みんな描き始めるととても楽しそうで、夢中に鉛筆を動かしていました。中には絵を描くのが苦手なで、その場では一緒に描けなかった子どももいましたが、園に戻ってから一緒に描きました。
- ・帰りの時間に子どもたちに感想を聞いてみると、一番多かったのが「絵を描くのが楽しかった〜！」という言葉でした。また家にかえってから、家族に話したようで、「絵を描いたのが、すごく楽しかったみたいです」という言葉もいただきました。

6. まとめ

レッジョ・エミリアの幼児教育で行われている様々な美的活動における学びの「可視化」について、ひろしま美術館という「場」と園児達が一番興味をしめしたピカソの絵（女性の半身像）を用いてその効果の検証を試みる授業実践を行った。学習過程のモデルの中で一番注目した園児の活動は、「見て感じたことを、一人ひとりが主体的に表現する」という学びである。同じ絵を見て、同じ部分の続き絵を描く過程から、それぞれの感じたことが、違いとして、個性として表現されていることが、園児の作品から見てとれる。何も描かれていない白紙の画用紙ではなく、同じ画像を起点にすることにより、学びがより創造性を広げた「可視化」となっていたのではないだろうか。

また、美術館という場所や空間との出会いは、日常過ごしている空間と違った新鮮な気持ちを与える。本物の色々な作品と対話することによって、お互いに様々な気づきや発見を共有することが出来、個々のもつ「創造性」を引き出すきっかけとなつたのではないかとも思える。

今後は、学びの「可視化」のもつ可能性をさらに広げることができる題材やその方法の研究を引き続き行っていきたいと考える。

引用・参考文献

- 1) レッジョチルドレン ドムス・アカデミー・リサーチセンター ジェリーオ・チェッピ、『子ども、空間、関係性 幼児期のための環境のメタプロジェクト』、学研、p. 32, 2008
 - 2) 佐藤学監修、『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、ワタリウム美術館、p. 35, 2011
 - 3) 同上、p. 36
 - 4) 同上、pp. 38-39
 - 5) 同上、p. 41
 - 6) 同上、p. 56
- ジャイムス・ヒルマン、『場所の魂』、Rizzoli, Milano, 2004
- 聖モニカ幼稚園教諭、『園児の様子について』、園児の観察記録より、2013
- 収蔵品図録－西洋編、『ひろしま美術館』、pp. 142-143, 1994

美術館で描いた園児たちの作品

